

修士論文（要旨）
2022年1月

Highly Sensitive Person（HSP）傾向の対人場面におけるストレス反応
と対処方略の検討
—BIS/BASに基づくHSPの特徴—

指導 池田 美樹 准教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
220J4004
大瀧 乃愛

Master's Thesis (Abstract)
January 2022

The relationship between HSP trait and stress response and coping
strategies in the interpersonal situation:
HSP classification using BIS/BAS

Noe Otaki
220J4004
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

目次

第1章 問題と目的.....	1
1.1 大学生の対人関係.....	1
1.2 個人特性としての感覚処理感受性 (SPS)	2
1.3 HSP と行動抑制系 (BIS) /行動賦活系 (BAS)	3
1.4 HSP と精神的健康の関連.....	5
1.5 対処方略 (ストレスコーピング)	6
1.6 本研究の目的と研究意義.....	7
第2章 方法.....	8
2.1 調査期間.....	8
2.2 研究対象者.....	8
2.3 研究対象者の抽出方法.....	8
2.4 手続き.....	8
2.5 分析方法.....	10
2.6 倫理的配慮.....	11
第3章 結果.....	11
3.1 分析対象者の概要.....	11
3.2 各尺度の記述統計.....	13
3.3 HSP 傾向と各尺度間の相関分析.....	17
3.4 群2 (HSP 群・非 HSP 群) ×場面2 (回避可能場面・回避困難場面) の二要因混合 計画分散分析.....	21
3.5 HSP のサブタイプによる比較—HSP 得点と BIS/BAS 得点による個人特性の分 類.....	23
3.6 群2 (HSP1・HSP2) ごとの対人場面の回避困難度.....	23
3.7 群2 (HSP1・HSP2) ×場面2 (回避可能場面・回避困難場面) の二要因混合計画 分散分析.....	28
3.8 各対人場面における HSP 傾向と対処方略からストレス反応生成までのプロセスにつ いてのパス解析.....	33
第4章 考察.....	35
4.1 HSP 群・非 HSP 群の人口統計的変数.....	35
4.2 各尺度の記述統計 (ストレス反応のカットオフ値との比較)	35
4.3 HSP 群と非 HSP 群における BIS/BAS 得点および対人場面の回避困難度の差異の比 較.....	35
4.4 HSP 傾向と各尺度間の相関分析.....	36
4.5 群2 (HSP 群・非 HSP 群) ×場面2 (回避可能場面・回避困難場面) の二要因混合 計画分散分析.....	38
4.6 HSP 得点と BIS/BAS 得点による個人特性の分類.....	40
4.7 HSP1・HSP2 における対人場面の回避困難度の差異.....	40
4.8 群2 (HSP1・HSP2) ×場面2 (回避可能場面・回避困難場面) の二要因混合計画 分散分析.....	40

4.5	パス解析.....	42
第5章	おわりに.....	42
5.1	総合考察.....	42
5.2	本研究の限界と今後の課題.....	45
5.3	謝辞.....	46

引用文献

添付資料

第1章 問題と目的

大学生の社会不適応の要因の1つとして、対人関係上の問題があげられ、田中・板山(2017)は、大学で経験する人間関係における困難感に適応感に強い影響を与えることを示唆している。

ストレス反応をより引き起こしやすくする個人特性の1つとして近年、感覚処理感受性(SPS)との関連が注目されている。SPSとは、「脳における様々な感覚情報の処理に関する敏感さの程度を表す概念」(Aron, 1997)とされ、SPSが高く、刺激に対して敏感な人たちはHighly Sensitive Person(HSP)と位置づけられ、人口全体の15~20%の割合で存在する(Aron, 2008)とされる。HSPは、心身の不適応(高橋・熊野, 2019)や抑うつや不安の高さ(Liss, Timmel, Baxley, & Killingsworth, 2005)、ストレスの高さ(Grant, 2006)などとの関連が示されている。HSPの行動のパターンは、脳神経系システムの行動抑制系(BIS)と行動賦活系(BAS)の違いから2つのパターンに分けることができる(Aron, 2008)。なおBISは、潜在的な罰やフラストレーションを引き起こすような無報酬の条件刺激、新奇刺激の存在に対する感受性であり、嫌悪刺激を回避するような行動と関連がある。BASは、報酬や罰の不在を知らせる条件刺激に対する感受性であり、接近的な行動の始発と関連がある(高橋・繁柘, 2008)とされる。HSPのうち、BISのレベルは平均的だが、BASのレベルは低いというタイプ(以下、HSP1)とBIS/BASのレベルも高いが、BASのレベルの高さはBISを圧倒するほどの高さではないというタイプ(以下、HSP2)に分けられ、刺激に対する行動の違いがみられる。

対処方略(ストレスコーピング)とは、Lazarusら(1991)によって「能力や技能を使い果たしてしまうと判断され自分の力だけではどうすることもできないとみなされるような、特定の環境からの強制と自分自身の内部からの強制の双方、あるいはいずれか一方を、適切に処理し統制していこうとなされる、絶えず変化していく認知的努力と行動的による努力」と定義されている。適応的なストレス対処では、あらゆるタイプの方略をバランスよく採用することが推奨されている(神村, 1996)。

大学生のストレス反応や対処方略を検討する際には、大学生に特徴的なストレス場面があること(高坂, 2012)、および対処方略の裁量度や選択される対処方略の違いは、ストレス場面の差異が関連していると考えられる。そこで本研究では、対人場面の違いとして、回避可能場面と回避困難場面の2つの場面を採用した。本研究では、対処方略の選択の裁量度の異なる2つのストレス場面(回避可能・回避困難)におけるHSP1とHSP2の対処方略の特徴とストレス反応の検討を行うことを目的とした。具体的には、第1の目的として、対処の裁量度の異なる2つの対人場面(回避可能・回避困難)を設定し、各場面におけるHSPと非HSP群の差異を検討する。第2の目的に、HSP1とHSP2の各対人場面(回避可能場面・回避困難場面)におけるストレス反応、対処方略の差異を検討することとした。

第2章

2.1 手続き

桜美林大学研究活動倫理審査委員会の審査後(承認番号:20039)、A大学の学生を中心に他大学を含む大学生(18歳~24歳)を対象とし、オンライン上でGoogleフォームのURLを提示し、対象者に無記名で回答を求めた。

2.2 質問紙の構成

調査項目には(1)HSP傾向:Highly Sensitive Person Scale日本版(高橋, 2016)、(2)BIS/BAS:BIS/BAS尺度日本語版(高橋・山形・木島他, 2007)、(3)心理的ストレス反応尺度(鈴木・嶋田・三浦他, 1997)、(4)TAC-24(神村・海老原・佐藤, 1995)を用いた。また、2つの対人場面(回避可能場面・回避困難場面)ごとに、ストレス反応と対処方略への回答を求めた。なお、操作チェックとして、各場面の回避困難度について「0=避けられる」~「10=避けられない」として、10点満点で評定を求めた。

第3章

3.1 結果と考察

分析対象者 229 名（男性 69 名，女性 154 名，その他 6 名，平均 20.03 歳， $SD = \pm 1.13$ ，有効回答率 98.7%）を対象に分析を行った。HSP 群 41 名（男性 8 名，女性 32 名，その他 1 名，平均 20.07 歳， $SD = \pm 1.23$ ），非 HSP 群 188 名（男性 61 名，女性 122 名，その他 5 名，平均 20.02 歳， $SD = \pm 1.11$ ）について，群 2（HSP 群・非 HSP 群） \times 場面 2（回避可能場面・回避困難場面）の二要因混合計画の分散分析を行い，交互作用が有意であった場合，単純主効果の検定（Bonferroni 法）を行った結果（Table 1），ストレス反応においては，交互作用はみられなかった。単純主効果の検定を行った結果，HSP 傾向が高い人は，低い人に比べて対人場面におけるストレス反応が高いことが示された。さらに，対人場面の状況の違いによってストレスを感じる強さにも違いがみられ，HSP 傾向が高い人はそうでない人に比べ，役割が規定され，他者との関わりを自分の意志で選択することが難しい状況において，抑うつ・不安，不機嫌・怒りが高い傾向が示された。無気力に関しては，HSP 傾向が高い人ほど高まりやすい傾向があるが，対人場面の違いによる差はみられないことが示された。

対処方略においては，計画立案においては交互作用がみられた。HSP 傾向が高い人ほど，回避可能場面，回避困難場面の双方で刺激に対してより慎重に行動し，その後の行動についてより深く考える傾向があることが推察される。HSP 傾向がみられない大学生の特徴としては，回避可能場面では計画立案を採用しにくい，回避困難場面においては，その後の行動についてより深く考える傾向があることが示唆された。

選択された対処方略の群における特徴として，HSP 群は，「かかわる対象の違い（具体的問題か情緒か）」「かかわり方（接近的か回避的か）」「機能する反応系の違い（認知系か行動系か）」（神村，1995）において，大きな偏りなく採用されていることが示唆された。また，HSP 傾向がある中でも学校生活に適應することができていることから，神村ら（1995），加藤（2001）が示すように，対処方略をバランスよく，かつ柔軟に選択することで，刺激に対する敏感さはありながらも精神的健康を保ちながら生活していることが推察される。

対人場面における選択された対処方略の特徴として，回避可能場面では具体的な問題に焦点を当てつつ，問題に対して距離を置こうとする傾向があることが示唆された。一方，回避困難場面では積極的に問題にかかわり，具体的にその状況に対処するために行動する傾向にあることが示唆された。

HSP 群の中から HSP1 の基準に該当する 15 名（男性 5 名，女性 9 名，その他 1 名，平均年齢 20.33 歳， $SD = 1.40$ ），HSP2 の基準に該当する 7 名（女性 7 名，平均年齢 20.29 歳， $SD = 1.38$ ）をそれぞれ抽出し，群 2（HSP1・HSP2） \times 場面 2（回避可能場面・回避困難場面）の二要因混合計画の分散分析を行い，交互作用が有意であった場合，単純主効果の検定（Bonferroni 法）を行った結果（Table 2），ストレス反応においては，交互作用はみられなかった。単純主効果の検定を行った結果，対人場面によってストレス反応の高さに違いがみられ，中でも抑うつ・不安，不機嫌・怒りにおいて，ストレス反応の程度に差がみられた。また，HSP1 に比べ HSP2 の方が不機嫌・怒りが高いことが示された。BIS が抑うつ・不安の素因である（山形・高橋・木島ら，2011）こと，BAS が高い人ほど怒りを感じやすい傾向がある（Harmon-Jones，2005）ことが示唆されていることから，BIS，BAS 双方が高い HSP2 は，HSP1 に比べ，抑うつ・不安および怒りが高い傾向があり，ストレス反応が高いことが示唆された。場面での比較では，回避困難場面の方がよりストレスを強く感じやすく，特に抑うつ・不安，不機嫌・怒りを感じやすいということが示された。また，無気力は群（HSP1・HSP2），場面（回避可能・回避困難）において差がないことが示された。

対処方略については，HSP1 は，回避可能場面では問題から距離を置く対処，回避困難場面では，他者に頼る対処を選択しやすく，HSP2 は，回避可能場面では，問題から距離を置いたり，他者の力を借りたりすることで，直接的なかかわりを避け，その場をやり過ごすといった，回避的な対処を多く採用しやすい一方，回避困難場面ではこれらの対処を採用しにくい

という傾向を示す可能性が示唆された。

さらに、HSP1 と HSP2 の対処方略を比較すると、かかわり方や機能する反応系の違いに大きな偏りは見られないものの、HSP2 は HSP1 に比べ、情動焦点型の対処を行いやすい傾向にあることが示唆された。HSP2 は、BIS の高さによる抑うつ・不安の高まりや、BAS の高さによる不機嫌・怒りの高まりに加え、情動焦点型の対処を採用しやすい傾向によって、さらにストレス反応が高められる可能性があると考えられる。

場面ごとの比較では、回避困難場面では、共感的に体験を語るといった対処が用いられ、一方、回避可能場面では問題から距離を置くといった対処を行いやすい傾向があることが示唆された。他者の感情刺激を敏感に受け止める傾向（赤城・中村，2017）によってストレスを感じつつも、回避的な対処，例えば，他者に働きかけをしないことで互いに傷つけ合うことを回避し（加藤，2001），他者との良好な関係を形成することでストレス反応を低下させる（加藤，2002）ことで，その場に適応していることが推察される。

また、HSP は、他者の感情刺激を敏感に受け止めているにもかかわらず、自身の感情をコントロールすることが困難なため、生きにくさを抱えている（赤城・中村，2017）ために、意識的にポジティブな感情にも目を向けるなど、自身の感情に焦点を当てた対処を習慣づけたり、認知再構成法等を用いて、刺激に対する認知を変化させたりすることで、ストレスの緩和につながると考えられる。

本研究の限界点および今後の課題としては、本研究で対象とした大学生は、HSP という傾向を有している場合においても、心身の不適応を引き起こすことなく、日常生活を送ることができていることが前提であったため、HSP 傾向がより高い者に対しては、更なる検討が必要である。したがって、対人場面の状況の差異の整理に加え、本人の他者とかかわる程度や親密さ、周囲の状況など、場面の設定基準をより厳密に揃えたうえで、ストレス反応に対して元々の適応感の高さが影響しているのか、対処方略によってストレス反応が低減されているのかについての検討は今後の課題である。

Table 1 HSP 群・非 HSP 群における対人場面の違いによるストレス反応・対処方略の比較

対処方略	回避可能場面				回避困難場面				被験者内		ペアごとの比較		
	HSP群		非HSP群		HSP群		非HSP群		F値	交互作用	群	対人場面	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				回避可能<	回避困難
ストレス反応	18.59	12.37	11.36	10.49	23.71	14.87	16.29	11.92	33.93 **		HSP>非HSP **	回避可能<	回避困難 **
抑うつ・不安	6.05	4.83	3.54	3.89	8.54	6.10	5.88	4.40	43.09 **		HSP>非HSP **	回避可能<	回避困難 **
不機嫌・怒り	4.41	4.78	3.06	3.51	7.24	5.53	4.97	4.30	43.36 **		HSP>非HSP *	回避可能<	回避困難 **
無気力	8.12	5.24	4.77	4.39	7.93	5.71	5.44	4.63	.48		HSP>非HSP **	回避可能<	回避困難
カタレンス	8.39	4.22	6.64	3.43	8.83	3.97	7.73	3.47	8.01 *		HSP>非HSP *	回避可能<	回避困難 *
放棄・諦め	9.71	3.59	8.14	3.62	8.29	4.05	6.37	3.18	34.09 **		HSP>非HSP *	回避可能>	回避困難 **
情報収集	6.98	3.57	5.80	3.25	7.41	3.43	6.36	3.35	4.58 *		HSP>非HSP *	回避可能<	回避困難 **
気晴らし	9.10	4.06	8.09	3.46	7.61	3.66	7.19	3.54	24.37 **		HSP>非HSP **	回避可能>	回避困難 **
回避的思考	9.66	3.96	7.72	2.98	9.44	3.83	7.45	3.30	.78		HSP>非HSP **	回避可能>	回避困難
肯定的解釈	9.34	3.80	8.45	3.35	9.24	3.24	8.27	3.50	.41		HSP>非HSP **	回避可能>	回避困難
計画立案	9.24	3.49	7.18	3.45	9.73	3.11	8.67	3.60	18.40 **	4.72 *	HSP>非HSP *	回避可能>	回避困難 **
責任転嫁	5.68	2.72	4.93	2.26	6.29	2.84	5.17	2.73	5.73 *		HSP>非HSP *	回避可能<	回避困難 *
問題焦点型	31.61	8.55	26.05	8.59	31.73	7.75	26.57	7.80	.43		HSP>非HSP **	回避可能<	回避困難
情動焦点型	36.49	11.09	30.89	9.56	35.12	10.08	30.64	9.97	1.64		HSP>非HSP *	回避可能>	回避困難

** $p < .001$, * $p < .05$

Table 2 HSP1・HSP2における退陣場面の違いにおけるストレス反応・対処方略の比較

対処方略	回避可能場面				回避困難場面				被験者内		ペアごとの比較		
	HSP1		HSP2		HSP1		HSP2		F値	交互作用	群	場面	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				回避可能<	回避困難
ストレス反応	16.40	8.62	24.00	17.83	22.93	13.92	30.57	16.64	8.21 *		HSP1<HSP2 †	回避可能<	回避困難 *
抑うつ・不安	5.20	3.05	7.00	6.83	8.40	6.33	10.43	7.39	6.32 *		HSP1<HSP2 †	回避可能<	回避困難 *
不機嫌・怒り	2.40	2.64	7.00	6.81	6.80	5.07	9.71	5.56	17.31 **		HSP1<HSP2 †	回避可能<	回避困難 **
無気力	8.80	4.90	10.00	6.35	7.73	6.08	10.43	6.02	.12			回避可能<	回避困難
カタレンス	7.27	3.33	9.57	5.59	8.20	3.12	12.00	4.58	7.07 *		HSP1<HSP2 †	回避可能<	回避困難 *
放棄・諦め	9.87	3.46	10.14	3.24	8.07	3.35	5.57	1.99	31.73 **	6.00 *		回避可能>	回避困難 **
情報収集	6.40	3.36	8.29	2.81	8.00	3.00	7.57	3.78	.51	3.48 †		回避可能>	回避困難 **
気晴らし	8.53	4.69	8.43	2.23	6.40	3.33	8.14	2.97	5.21 *	3.04 †		回避可能>	回避困難 *
回避的思考	8.87	2.80	10.71	4.54	7.87	2.88	10.86	3.72	.43			回避可能>	回避困難
肯定的解釈	7.93	3.39	10.43	4.43	7.87	2.50	8.57	3.05	2.56			回避可能>	回避困難
計画立案	8.87	3.29	9.29	2.21	9.33	2.69	9.43	1.51	.43			回避可能>	回避困難
責任転嫁	4.87	2.00	5.71	2.69	5.93	2.40	5.00	2.00	.19	4.85 *		回避可能>	回避困難
問題焦点型	30.00	7.62	33.43	7.68	31.33	7.72	27.57	6.32	3.91 †	9.87 *		回避可能>	回避困難 †
情動焦点型	32.60	8.85	39.14	6.28	30.33	8.13	39.57	7.81	.99		HSP1<HSP2 *	回避可能>	回避困難 †

** $p < .001$, * $p < .05$, † $p < .10$

【引用文献】

- 赤城知里・中村真理 (2017). 感覚処理感受性とソーシャルスキル, 精神的回復力の関連性の検討 東京成徳大学臨床心理学研究, 17, 59-67
- Aron, E. N・富田香里 (訳) (2008). ささいなことにもすぐに「動揺」してしまうあなたへ。SBクリエイティブ株式会社
- Bianca Acevedo, Elaine Aron, Sarah Pospos and Dana Jessen (2018). The functional highly sensitive brain: a review of the brain circuits underlying sensory processing sensitivity and seemingly related disorders *Philosophical Transactions of The Royal Society B Biological Sciences*, 373, 1-5.
- Eddie Harmon-Jones (2005). Anger and the behavioral approach system *Personality and Individual Differences*, 35, 995-1005.
- Elaine N. Aron and Arthur Aron (1997). Sensory-Processing Sensitivity and Its Relation to Introversion and Emotionality *Journal of Personality and Social Psychology*, 73(2), 345-368.
- 福岡欣治・橋本 幸(1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409
- 船橋亜季 (2013). 成人用感覚感受性尺度作成の試み 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12, 29-36
- 後藤 学・大坊郁夫 (2003). 大学生はどんな対人場面を苦手とし, 得意とするのか?——コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連—— 対人社會心理学研究, 3, 57-63
- Grant Benham (2006). The Highly Sensitive Person: Stress and physical symptom reports *Personality and Individual Differences*, 40, 1433-1440.
- 薄 勇樹・浅岡有紀・逸見知美・田中真理 (2015). 大学生の感覚感受性傾向が対人ストレスコーピングならびに居場所感に与える影響 東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 139-145
- 平野真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討—もともとの「弱さ」を後天的に補えるか—— 教育心理学研究, 60, 343-354
- 上出實子・大坊郁夫 (2008). 対人関係において認知された自己と親密度の関連: 現代の大学生の様々な親密の関係 対人社會心理学研究, 8, 51-58
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47
- 神村栄一 (1996). ストレス対処の個人差に関する臨床心理学的研究 株式会社風間書房
- Kathy A. Smolewska, Scott B. McCabe, Erik Z. Woody (2006). A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory-processing sensitivity and their relation to the BIS/BAS and “Big Five” *Personality and Individual Differences*, 40, 1269-1279.
- 加藤 司(2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234
- 加藤 司(2001). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 心理学研究, 72, 57-63
- 加藤 司(2001). 対人ストレスコーピングと Big Five との関連について 性格心理学研究, 9, 140-141
- 加藤 司(2002). 対人ストレス過程における社会的相互作用の役割 実験社会心理学研究, 41, 147-154
- Liss, M., Timmel, L., Baxley, K., & Killingsworth, P. (2005). Sensory processing sensitivity and its relation to parental bonding, anxiety, and depression. *Personality and Individual Differences*, 39, 1429-1439.
- リチャード S. ラザルス・スーザン・フォルクマン (著) 本明 寛・春木 豊・小田正美 (訳) (1991). ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究 株式会社実務教育出版
- 森田美登里 (2008). 回避型コーピングの用いられ方がストレス低減に及ぼす影響 健康心理学研究, 21, 21-30

- 毛利伊吹・丹野義彦 (2001) . 対人状況不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究, 14, 23-31
- 永井暁行 (2016) . 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64, 199-211
- 西口利文 (2015) . 大学生が直面する対人問題場面の分類——具体的状況と対象人物からの整理—— 日本教育心理学会総会発表論文集, 398
- 西村千尋・小野久江 (2010) . コーピングが大学生の精神的健康に及ぼす影響について 臨床教育心理学研究, 36, 9-14
- 太田 仁 (2020) . 援助要請態度と気質との関連性 奈良大学紀要, 48, 19-30
- 大沢知隼・橋本 塁・嶋田洋徳 (2018) . 注意バイアス修正訓練を取り入れた集団ソーシャルスキルトレーニングが児童生徒のソーシャルスキルの維持と般化に及ぼす影響——報酬への感受性の高低による効果の違いの比較—— 教育心理学研究, 66, 300-312
- 下村寛治・西口雄基・石垣琢磨 (2021) . 加害型 TKS と SAD の予測因子——BIS/BAS および過剰適応に注目した探索研究—— パーソナリティ研究, 29, 150-158
- 白井利明 (2006) . 現代少年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴——変容確認法の開発に関する研究 (Ⅲ) —— 大阪教育大学紀要, 54, 15-171
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997) . 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29
- 高垣耕企・岡島 義・坂野雄二 (2012) . 大学生の認知行動的特徴と抑うつ症状の変化との関連性——スキーマと行動の選択要因に焦点を当てて パーソナリティ研究, 21, 63-73
- 高橋亜紀 (2016) . Highly Sensitive Person Scale 日本語版 (HSPS-19) の作成 感情心理学研究, 23, 68-77
- 高橋 徹・熊野宏昭 (2019) . 日本在住の青年における感覚処理感受性と心身の不適応の関連——重回帰分析における感覚処理感受性の下位因子ごとの検討—— 人間科学研究, 32, 235-243
- 高橋雄介・繁柘算男 (2008) . 罰の回避と報酬への接近の感受性を測定する 3 尺度の比較 パーソナリティ研究, 17, 72-81
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁柘算男・大野 裕・安藤寿康 (2007) . Gray の気質モデル——BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討 パーソナリティ研究, 15, 276-289
- 高坂茉里 (2012) . 大学生の対人関係と学校ストレス——1年生と3年生を対象とした調査研究—— 暁星論叢, 62, 55-84
- 竹淵香織 (2016) . 大学生における人間関係の希薄化：対人不安を抱える学生と学生相談室で扱われる「相手のいない対人関係相談」の増加から 聖学院大学総合研究所紀要, 62, 156-167
- 武田友紀 (2018) . 「気が付きすぎて疲れる」が驚くほどなくなる本「繊細さん」の本 飛鳥新社
- 竹端佑介・後和美朝 (2017) . 過剰適応と性格特性が抑うつに与える影響について——大学生を対象にして—— 国際研究論叢, 31, 7-19
- 竹端佑介・佐瀬竜一 (2015) . 大学生の不適応について：不適応状態の判断と過剰適応の視点から 国際研究論叢, 28, 65-71
- 田中亜祐子・板山 昂 (2017) . 大学生の自己困難認知と大学適応との関係 教育総合研究叢書, 10, 13-27
- 辻本江美・竹谷怜子・小野久江 (2012) . 大学生のコーピングと抑うつ状態・自殺との関連について 臨床教育心理学研究, 38, 23-26
- 上野雄己・高橋亜紀・小塩真司 (2020) . Highly Sensitive Person は主観的幸福感が低いのか——感覚処理感受性と人生に対する満足度, 自尊感情との関連から—— 感情心理学研究, 27, 104-109
- 内田香奈子・山崎勝之 (2008) . 大学生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに

- 及ぼす影響の予測的研究, パーソナリティ研究, *16*, 378-387
- 山田博和・山岸昌平 (2017) . 近年の大学生を対象としたストレスコーピング研究の展望 : 影響要因に注目して 武蔵野大学心理臨床センター紀要, *17*, 45-54
- 山形伸二・高橋雄介・木島伸彦・大野 裕・安藤寿康 (2011) . Gray の行動抑制系と不安・抑うつ——双生児法による 4 つの因果モデルの検討—— パーソナリティ研究, *20*, 110-117
- 矢野康介・大石和男 (2017) . Highly Sensitive Person におけるライフスキルと抑うつ傾向の関連——非 Highly Sensitive Person との比較の観点から—— 日本心理学会大会発表論文集, *81*, 54